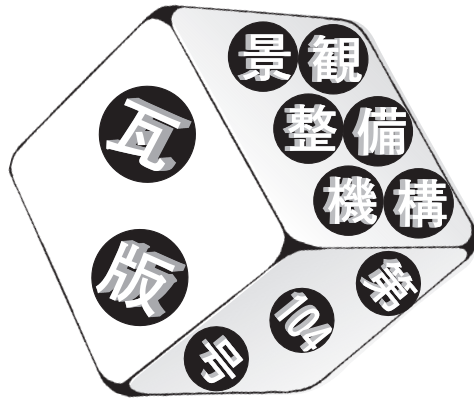




夏の京都府綾部市のまあるい山



冬の京都府綾部市のまあるい山

続々・家康 × 原風景 = 富士山²

徳川家康の原風景は富士山だった、という仮説を基に、2つの出来事の真相を書き綴ってきた。幼少年期に見た風景が、おとなになった時の行動に色濃く反映される、というお話しである。

このシリーズの最終回は、私の原風景も実は富士山だったのではないかと、というお話しである。

京都府の丹波山地に源流をもち、日本海にそそぐ由良川の中流域に広がる盆地が、私の原風景である。同じくらいの人口規模のふたつの小都市、綾部市と福知山市にまたがる地域のほぼ中央に位置する集落が、私が生まれて18年間を過ごした場所である。

とうとうとして由良川が流れ、おだやかな山々に囲まれた田園地帯には、四季折々の美しい風景があった。静岡県に来て気づいたことだが、京都府には1000mを超える山は存在しない。私が生まれ育った盆地は、せいぜい標高400mか500mくらいの山で囲まれていた。山のかたちは丸く、まあるい山というか、おだやかな山に包まれていたのである。富士山から遠いばかりか、実物の富士山が見えないのに、ではなぜ富士山が原風景だったというのか。

★

こどもの頃一番よく遊んだ場所は、生家のすぐそばにあった荒倉神社の境内と公会堂前の広場だった。

神社の境内には、こども10人が手をつないでやっと一周できる巨木が、60度くらいの角度に斜めに伸びていた。地面から2mくらいのところに、幹の一部が1回転してできたくぐり穴があって、それを抜けるとこども5～6人が登ってられる広さがあった。そこを陣地にして探偵ごっこをして遊んだ。

神社と連続する公会堂の広場は、三角ベースやゴロ野球、エスケンをする遊び場だった。由良川の支流である荒倉川が広場を遠巻きにするように流れていて、ボールがノーバウンドで川に入るとホームランというルールだった。広場は夏休みの朝のラジオ体操や盆踊りの場所でもあった。

★

公会堂では、年に4～5回やってくる巡回映画が上映された。夏は広場で屋外上映された。東映の時代劇が一番ワクワクする出し物だった。大川橋蔵、中村錦之助、大友柳太朗の全盛時代だった。クライマックスになるとみんな拍手をして、身を乗り出して声を上げた。『新吾十番勝負』や『一心太助』のシリーズ、『忠臣蔵』『清水次郎長』などの東映オールスター総出演映画がとくに大好きだった。

これらの時代劇に決まって出てきた場面は、富士山に青空、茶畑に茶摘み娘がにっこりして、その道中を橋蔵や錦ちゃんが手を振って歩いていくシーンである。なんと穏やかな、なんと明るい情景なんだろう。白い雪を抱いた秀麗な富士山の姿、なんと美しい山なんだろう。富士山が青い空と青い海に包まれてそびえ立っている。なんと開放的なところなんだろう。富士山の映像がこどもの心に強烈に印象づけられたのである。繰り返し見る富士山の映像が心の中に沈潜していったのである。

★

生まれてからひとところで育ち18年間住み続けた私は、自我に目覚めるころまでその場所で過ごした季節や風景を「当たり前」のこととして思い込んでいた。山陰の小都市の季節や風景を「当たり前」のこととして受け入れてきた中で見た異質の映像は、衝撃だった。美しい富士山、秀麗な富士山は、歳を追うごとに"あこがれ"となって心の中に育っていったように思う。

★

45年前、就職先を決める時、47都道府県の中から1つ、ここだと思って静岡県を選んだ。それは心の中の映像が現実の姿として存在する場所で生きていきたいと、私の心がそう思わせたのである。心の中の映像とは、すなわち原風景なのではないか。

家康と横並びで考えることは恐れ多いが、この偉大な富士山に魅せられた心が、行動を起こさせたと思うのである。

塩見 寛（景観整備機構・まちづくり委員会 委員長）